

# 刀鍛冶かたなかじ

志太地域周辺は、室町時代（一三三八〜一五七三）中期から江戸時代（一六〇三〜一八六八）中期にかけて、多くの優秀な刀鍛冶を輩出しました。室町時代は、領地を奪い合う戦いが全国いたる所で行われ、一国を保持していくためには、強力な軍事力が必要でした。その要は刀剣武器の確保でした。当時この志太地域一帯は今川氏の支配下にあり、今川氏は、多くの刀鍛冶の育成に力をつけました。そして次の領主である徳川家もまた、この地域を軍事的に重要な場所とし、今川氏同様に刀鍛冶の育成に努めたのです。志太地域の刀鍛冶としては、天保十三年（一八四二）の藤枝宿絵図に「重信」という刀鍛冶が記録されています。

重信は、本名・鈴木重信、銘を源重信と手づくりの技術は一郎さんで途絶えようとしています。

また、このほかにも江戸時代・嘉永年間（一八四八〜一八五四）、藤枝市広幡に「鬼島鍛冶」がいたという記録も残っています。



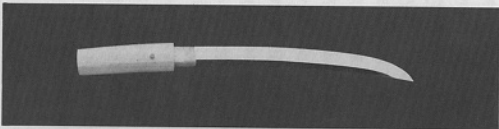
公儀御用鍛冶の免許

いい、慶長一九年（一六一四）に徳川家康より公儀御鍛冶を拜命し、課役御免の木版が残っていることから、江戸時代・慶長年間（一五九六〜一六二五）にはすでに重信という名を代々襲名していました。

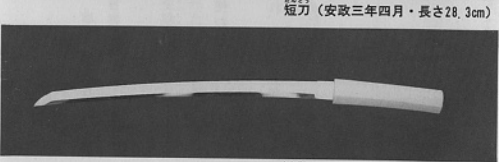
現存している刀は、江戸時代末期の重信作のもので、安政三年（一八五六）作の短刀、安政四年（一八五七）作の脇差、慶応元年（一八六五）作の短刀、慶応二年（一八六六）作の薙刀の四本です。

明治時代（一八六八〜一九一二）になって魔刀令が発令され、刀鍛冶はなくなってしまうましたが、その技術は刃物鍛冶として藤枝市藤枝にある「重信刃物店」の現店主・鈴木一郎さん（一九二〜）に受け継がれています。

一郎さんは、十四歳のときに父親から刃物作りを習い、五十年以上刃物鍛冶として活躍しています。しかし、後継者がいないため、



短刀（安政三年四月・長さ28.3cm）



脇差（安政四年五月・長さ45.4cm）